

自然保育推進事業 活動報告書

1 団体名 学校法人広島女学院 広島女学院ゲーンズ幼稚園

2 今年度の活動概要

(1) 自然と触れ合う環境構成と学び

① 自然の中の色と染物活動



多くの子どもたちは、自然の中から生まれる色に夢中になって遊んでいる。泥水、葉っぱの色、木の実や花びらの色、木の皮を水につけてにじみ出てくる色・・・



草木の色でたっぷり遊びつつ、染物名人の久保田さんとそのお友だちと、年間を通じて、ゲーンズ農園で収穫した玉ねぎの皮染め、藍の種を蒔き、間引き、育て、生葉染め、乾燥藍での染を楽しんだ。保護者からも「やりたい!」と声上がり、子どもの藍染め翌日に保護者有志も楽しみ、世代間交流となった。

② 自然観察会

愛媛県松山市の東雲女子大学短期大学部から出原先生を招き、森や植物とのふれあい遊び、有毒植物について等、講和とフィールドワーク研修を行った。



③ リスクマネジメント講習会

春、夏、秋、冬と、年間を通じてリスクマネジメント講習を開催。春は微生物博士の島津さんをお招きし、親子でマダニを採集し、その習性や身を守る方法などを学んだ。冬でも活動する種がいること、マダニを素人でも安全にはがすことができる「ティック・ツイスター」の使い方などを実体験した。普段、好ましく思っていないはずのマダニを、白いフェルトの旗を振って捕獲できた時には、「やったー！マダニゲットだぜ！！」と歓喜の声が上がっていたことが面白かった。



また、広島フィールドミュージアム副代表、菊間さんが捕獲したマムシや他のたくさん種類のへびとの出会い、ふれあいを通して、野外活動の中で、自分の身を守ることにつながる豊かな体験を重ねることができた。さらには、森の中や園庭で、手作りの遊び空間を作りながら、楽しむこととリスク&ハザードの見極め、適切な匙加減を身に着ける体験も重ねてくることができた。



特に今年度、手作り遊具からの転落事故があり、手すりの位置や遊具下の凸凹、切り株の処理など、あらゆる子どもの動きを想定した環境構成に配慮すべきことを学び、これまで以上に「ヒヤリハット報告」を丁寧に取り組むことを全教職員で確認しあった。

④ ゲーンズ農園
・畑の土づくり



「ゲーンズ農園」の立て札が、2017年度卒園生からの贈り物。ますます、土づくりから植え付け、草取りや水やり、収穫とおいしくいただくことに喜びを大きく抱けるようになった。保護者有志で「ゲーンズ農園サポーターズ」が結成され、食育サークル「ひだまりの会」とも連動しながら、収穫したものをできるだけそのままの味を大切に子どもたちの口へ運ぶ流れができつつあることは、園にとっては大変心強いことであり、モノ・ヒト・コト・トキが有機的につながって、ともに育つ関係が生まれていることを大変うれしく感じている。



夏休みの間に収穫された夏野菜は、夏の預かり保育の子どもたちのおやつに！

・田起こし

亡くなられた園児のおじいちゃんが大切に守ってこられた田んぼ土を、「後継ぎがないもので・・・」と声をかけてくださり、トラックで先生たちがいただきに伺って生まれた「ゲーンズ田んぼ」。今年で10年目を迎えた。



田起こし、中起こし、代掻きを経て、さあ田植えをするぞと、準備をしていたところ、問題発生！田んぼの水が氾濫。6年ほど前に作った地下水路を点検すると、水路内にたくさんのツチガエルが！「ごめんね。ここが棲みやすかったんだね。でも、お引越ししてくださいね。」とお願いし、水圧をあげたホースを排水路に突っ込んで、移動してもらった。そのツチガエルは、今でも田んぼのそばのガーベラの大きな株の根元に棲みついている。



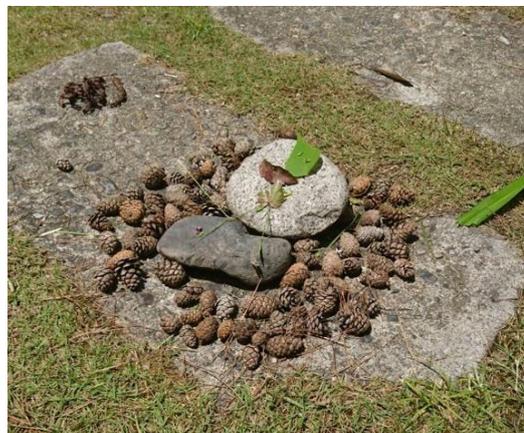
秋には収穫し、一番大変な脱穀をみんなで頑張っ、野外炊飯を楽しんだのは12月のこと。一人ほんの少しのお米が、近根に様々な工程、知恵、技術、空間、自然の恵み、人の汗によってできていることを皆で感じ、感謝を分かち合うひと時となった。

⑤ 動物介在プログラム



広島大学生物圏科学研究所の谷田先生との出会いから始まった「動物介在プログラム」。動物といっても、本来の野生動物のほかに、「展示動物」「飼育動物」「実験動物」「伴侶動物」「産業動物」等、人間の生活によって動物が様々な利用されていることにふれることを通して、人間が中心ではないこと、人間だけが生きているわけではないことを原体験として味わうことを目的としている。

園の周辺の野生動物の存在を、その足跡や食痕、活動痕や死骸などを通して感じ取り、興味・関心を持つと同時に、「さわらない」ことや「出会ったときに対処」「森に入るときの服装」等、リスクマネジメントについてもレクチャーを受けた。



上のウリ坊は、大雨の翌日に広島女学院牛田キャンパス内を流れる二又川で発見したもの。さわってみたい子もいたが、少し距離を置いて観察した後、別の場所で、石を並べてお墓とし、みんなで祈りを捧げた。「かみさま、このうりぼうが、おそろでも たのしくかけまわって あそべますように。かぞくのみんまも、さびしいおもいをしているかもしれませんが、なぐさめ、まもってあげてください。」と。

⑥ 保育実践研修会

「自然とのふれあいを大切に保育を進める」ことは、聞こえはいいが、実践することは簡単なこと、楽しいことばかりでなく、正しい知識や豊かな知恵、技術や情報処理、連携などの様々なスキルを身につけることが必要である。野外炊飯で焚火を起こそう、着火しようとした保育者が、マッチ一本から火をおこすことは簡単なことではなかったんだ！と痛感する出来事があった。こうした個々の課題を共有しながら、実践的な学びを展開する「保育実践研修会」を不定期に開催した。それは、できる限り保育時間内に、保育活動の中にインタープリターやエデュケーターが加わる形で、つまり本当に実戦形式で行った。



何度も登場する、菊間さんと牛田山を藪漕ぎしながらのロープワークや、園庭に絶

えず「たき火」がある環境での、子どもの遊びと生活であったり、新しい遊び場づくりの環境構成などである。こうした学びの積み重ねから、⑦の遊び環境づくりが展開していった。

⑦ 遊び環境整備

園庭空間は一体的な空間ではあっても、大まかに「年少組保育室前」の少く言う間および通用門からの生活同線部分と、「年中長保育室前」の固定遊具や砂場、動物小屋や田んぼ、多くの植栽のある、そしてカラカラの丘からぼうけんのもりへ続く大空間とに分けることができる。

・年少保育室前空間

まずは、年少組の担任らを中心に、「年少組保育室前」の遊び環境を変えていきたいとの声が上がった。



園庭検討委員会を立ち上げ、外部の有識者（園児祖父の一級建築家山本さん、広島フィールドミュージアム副代表菊間さん）を交えて、夢を描いていった。

子どもたちの遊び、生活する姿を、年間を通して観察し、この空間に、拠点性と多様性がほぼないことを課題として、それをどう創り上げていくかを検討した。

そこで描いた具体的な改善点は、ほとんど使用していない足洗い場のタイルをはがすこと、1平米ほどの砂場をもっと広くすること、かごにどさっと入れていた遊具を、きちんと収納できる空間や棚を作ること、居場所となるようなテーブルやベンチなどを設置することであった。

この構想は、2019年度に引き継がれることとなった。

・年中長前空間

この空間には、固定遊具がいくつかあり、耐用年数を迎えているもの、まだ使用は可能であるがその必要性に疑問を感じるものなどがある。そこで、これからの園庭をどうするか、検討を重ねていった。



このコンパン社製の遊具は、8本の柱のうち3本に腐食が見つかり、金属の足かせをして急場をしのぐことになった。が、3年以内に撤去する方針とした。



園庭の真ん中のケヤキの木は、根元を守るためにデッキを設置しているが、この上にツリーハウスを作ることを計画。子どもとともに遊び生活する中で進めて行くこととした。このツリーハウスが、コンパン社製の総合遊具を撤去した際に、そこにある「滑る」「登る」などの運動機能要素をすべて網羅するような設計となること、完成形をあらかじめ確定し、そこに向かっての作業ではなく、子どもたちの遊びの姿から常に変化でき、拡張できる可能性を残した形で進めていくこととした。また、その部材は極力ぼうけんのもりの中から集め、製材はできるだけ使用しないこと、

大型機械に頼らない方法で、子どもと保護者を巻き込みながら手作りする方針とすることとした。



2017年度に作ったデッキの周りに、2018年11月ファミリーデー「遊びランド」に参加した親子有志でまずは丸太スツールを配し、その間に高さ4メートルの柱を立てるところから作業はスタート。6本立った柱に梁を渡し、そこから12～1月にかけて、床を張る作業を展開。他の園に遊びに行った年長児が「ボルダリングが欲しい！」と訴えてくるのに応え、ツリーハウスに登る4つのルートのうち一つは、クライミングウォールにすることとした。一番長くて重い柱はなんと大人9人がかりで森から搬入。チェーンソーもうなる大木！



卒園にぎりぎり間に合う形で、3月上旬に遊び始めることができた。が、床を張る前から足場もないのにフライングして登ってくるつわもの、サルどもがたくさんいたのは言うまでもない。



2019年度は、ここから1段低いデッキを作り、「滑り棒」や「滑り台」を季節の総合遊具から移設することを計画している。



また、動物小屋「カラカラハウス」のデッキは、転落事故が発生したこともあり、安全性を高めつつ、安心して遊べる空間となるように今後の拡張計画を構想した。

(2) 活動報告

石窯再生プロジェクト

おとまり会で、カレーを作り、石窯でナンを焼いて食べようとプログラムを計画していたが、窯の中の天井がはがれて、モルタルのふりかけがトッピングされることに気が付き、急遽夏休みに、初代石窯を取り壊すところから始まった。冬にはピザパーティを計画しているので、そこには間に合わせたい。



取り壊してからでは遅いので、壊す前から、初代が一体どういう構造になっているかを記録しながら、子どもたちが見ている前で慎重に壊していった。「園長、本当に作れるの?」と不安や疑問が飛び交う中、ハンマー片手に石窯に立ち向かった。



2代目も同じかまぼこ型を選択。取り壊しとほぼ同時に、窯の空間の型を作っていく。手伝ってくれる子どもたちは大変頼もしいが、強いテンションがかかった状態の板は大変危険なので、そうした作業の時は、少し距離を置いて見守るように指示。釘だと反り返ろうとする力で抜けてしまうので、ネジを何本も使用。

かまぼこは、1度試作品を作ったが、上部がフラット面であったため、おそらくキーストーンが落下するだろうと予測し、直線のない、半円形の形に作り替えた。そのかまぼこを釜の土台（今回はここはそのまま使用）に置き、耐火煉瓦を耐火コンクリート（アサヒキャスト）で設えていく。



レンガの間にモルタルを詰める作業は、角度を測って作った大量のくさびを打ち込み、ケーキの生クリーム絞りの要領で目地を埋めていった。

最後の工程、二重構造の窯の入口については、作りながら試行錯誤していった。厳密な測定や計算をしていないので、かなり不安だったが、ぴたりとレンガがおさまってほっとした。



10月に完成し、11月に乾燥後火入れし、12月のピザパーティでは1日100枚近くを3日間焼き続けることができた。その後も、焼き芋、具沢山ちぎりパンなど、新たなメニューにもチャレンジしている。

ひだまりの会やゲーンズ農園サポーターズさんなど、園の諸活動を支えてくれている保護者にも、今後も積極的に活用してもらいたいところだ。